

アサヒスポーツに見る昭和初期のラグビーについての研究

A study on the rugby in the early Showa era in the Asahi sports

1K04B061

指導教員

主査 石井昌幸先生

神谷 隆太

副査 寒川恒夫先生

序論

ラグビーは、日本において高い人気を誇るスポーツである。特に大学ラグビーは伝統校が根強い人気を保っている。その背景として、各校が持っている独自のスタイルと古くからの激闘の歴史がある。

また、ラグビー自体も、応援スタイルなどで独自性があるといわれる。本研究では、こうした人気や独自のスタイルがいつ頃から発生していたか、またそれにはどのような背景があったのかを取り上げる。対象時期としては、試合日程や組織が整備される昭和2年から戦争によって中断する昭和18年までの昭和初期を、主要参考文献として、当時の総合スポーツ雑誌であるアサヒスポーツを使用する。

第1章

第1章では、明治時代に日本にラグビーが渡ってきてから、全国に広まっていく過程など、昭和以前の日本ラグビーと、当時の日本のスポーツ状況について述べる。

1899年(明治32)に慶應にラグビーが伝わって以来、三高、同志社、早稲田などにラグビーは徐々に広がっていった。試合日程やルール整備の問題から各地区に協会が設立され、1926年(大正15)に日本ラグビー協会が設立される。大学のみならず、京都・大阪を中心に中学、高専、クラブなど多くのラグビーチームができていき、全国大会も開催されるようになった。当時の日本は、経済の発展に伴う新中間層と呼ばれる人々や学生の増加、新聞やラジオなどメディアの働きによっ

てスポーツ熱が高まっていた。

第2章

第2章では、アサヒスポーツの記事を中心に、大学を中心とした日本ラグビー界の覇権争いと、各チームによるシステムなどの技術研究について述べる。

昭和初期、関東では毎年のように優勝校が変わる戦国時代だった。ルーツ校の慶應、その慶應を日本人チームとして初めて破った早稲田、両校に迫る明治など、現在まで続くライバル校同士が覇を競っていた。一方関西では、初の全国優勝校となった京大と、同志社による2強の様相を呈していた。各校は様々な独自のシステムを考案し、優勝争いを盛り上げていた。

関東では、早稲田、明治2校の実力が抜きん出てくる。この両校の戦いは毎年全勝対決となり、優勝決定戦となっていた。早稲田は、オーストラリア遠征の際に学んだバックス・フォワード一体となった素早い攻撃を発展させた「ゆさぶり攻撃」を考案。一方明治は、当時は主流でなかった8人フォワードによる強力な押しを武器としていた。こうして、現在まで続く両校のスタイルはこの頃すでに作られていた。一方、ライバルであった慶應、そして京大、同志社の関西勢はこの2校に遅れをとるようになる。

この時期、しばしば海外からチームが来日し、試合を行っている。来日した海外チームに対し日本の諸チームは体格では劣るものの、技術面では日本が培ってきた独自性を生かし、互角の勝負をすることもあった。

第3章

第3章では、アサヒスポーツの記事から読み取れる、ラグビーの人気、観客の様子など試合以外のことについて記述する。

アサヒスポーツでは、昭和に入って以降ラグビー記事が増大する。特に、シーズン佳境の12月、1月にはトップ記事や表紙写真を飾ることも多数あった。早慶戦、早明戦などの、東西各大学の対抗戦は、優勝決定戦として、また季節の風物詩として多くの観客が押しかけていた。また、女性の観客など、以前には見られなかった風景も見られるようになる。応援方法については現在まで続くラ

グビーの独自色がこの頃から存在している。日中、太平洋戦争が始まると、戦時における有効性の紹介や、ラグビーを元にした戦闘訓練用の球技の記事が掲載され、ラグビー記事にも影響が及んでくるようになる。

まとめ

現在まで続くラグビーの人気、各校のスタイル、独自の応援風景などは昭和初期にすでに存在していた。それらを作り上げ、現在まで持続してきたのはラグビーにかかわる数多くの選手の研究、ファンの思いによるものである。